

「静嘉堂@丸の内 饒舌館長一家言」

河野元昭氏

静嘉堂文庫美術館館長

三菱財閥創業家の岩崎彌之助・小彌太の父子二代が蒐集した文化財を保存研究する施設、「静嘉堂」を構成する静嘉堂文庫と静嘉堂文庫美術館。このうち美術館のギャラリーが東京・世田谷から丸の内に場所を移し 10 月 1 日に移転オープンしました。今回は同美術館の河野元昭館長に、新ギャラリーについて、また日本美術の魅力と奥深さについてお話をいただきました。

美術館に必要な質量主義と 5G

皇居外苑に面して立つ明治生命館の 1 階に 10 月 1 日、静嘉堂文庫美術館の展示ギャラリーがオープンしました。せっかく来館しやすい丸の内の立地を得ましたので、静嘉堂のコレクションを一人でも多くの方々に楽しんでいただこうという思いを込めて、より親しみやすい「静嘉堂@丸の内」というコミュニケーションネームを付けております。本日はこの「静嘉堂@丸の内」で目指した私が考える最高の美術館、アイデアルミュージアムとはどのようなものであるかを含め、美術館や美術品についてお話したいと思います。

さて美術館とはいかなるものか。長谷川栄著「新しい美術館学 エコ・ミュージゼの実際」(三交社)によれば、ポンピドー国立芸術文化センターの初代館長を務められたポントウス・フルテン先生はこう言っています。「美術館は生命を爆発させるとこ



ろだ。そこは生き生きとした空間であり、墓場のモニュメントにしてはならない」。

またミュージオロジー (美術館学) の権威であるザック・サロワ氏は著作の中で「コレクションは硬直化するやすぐさま死んだ状態になる。『生きた』コレクションは、絶えず進化し続ける」と述べています。

いずれも名言ですが、私のアイデアルミュージアムの定義には、これに質量主義という考え方を加えます。質とは、優れた作

品を展示する見やすいギャラリールームを持った美術館であること。量とは、より多くの人々に来てもらえる美術館であることを意味します。

この質と量の両輪があってこそそのアイデアルミュージアム。素晴らしいコレクションがあっても、わずかな来館者しか呼べない美術館では駄目。逆に質が劣る作品を展示して宣伝やPRの力で多くの来館者を集めるような美術館であっても駄目です。

また私は美術館5G説を唱えています。1つ目は学芸員、あるいは現場のG。優れた学芸員の存在、つまり現場の力が何より重要です。2つ目はギャラリー。優れた照明と雰囲気が作品を引き立てます。3つ目はグッズ。これからの美術館には買ってもらいたいと思うグッズがなければなりません。「静嘉堂@丸の内」は移転を機に館内ショップを世田谷時代の7倍に拡張しました。

そして4つ目はグルメ。美味しいレストランや洒落たカフェも必須です。明治生命館の地下には素晴らしい飲食店がたくさんあります。最後に5つ目はガーデン。都心では難しい条件ですが、世田谷の静嘉堂には素晴らしい庭園がありました。

琳派のある私立美術館ベスト5

日本の美術史、絵画史において最重要に位置づけられるジャンルの一つが琳派です。尾形光琳からその名を取った琳派は、第一世代の本阿弥光悦や俵屋宗達から第二世代の尾形光琳やその弟である尾形乾山へ、そして第三世代の酒井抱一やその弟子、鈴木其一へと受け継がれていきました。桃山・江戸期には琳派の他にも狩野派、土佐派、文人画、浮世絵といった優れた流派

があり画壇は百花繚乱でしたが、この中でも最も重要だったのが琳派です。ちなみに現在最も人気がある桃山・江戸期の絵画は、伊藤若冲の作品、浮世絵とりわけ葛飾北斎の作品、そして琳派の作品です。

光悦らの琳派の第一世代は京都で生まれました。平安遷都以降、京都で延々と育まれた文化、美術、造形の蓄積が琳派を生み、それが江戸政権の誕生により徐々に江戸へ流れ抱一や其一によって江戸琳派が確立したのです。世界では古代ギリシャやローマで生まれた文明が東へ東へと伝えられていく文明東漸が起きましたが、京都から江戸へ流れていった琳派にもこの東漸が起きたわけです。

さて天下に冠たる私立美術館を自負する「静嘉堂@丸の内」にも、琳派のコレクションが数多くありますが、東京都心エリアに限定して私が考えた琳派作品を持つ私立美術館のマイベスト5を紹介します。

5位は山種美術館。ここの「秋草鶉図屏風」は酒井抱一の洗練された美意識が凝縮された国の重要美術品。重要美術品は国宝、重要文化財に次ぐものですが現在は廃止され新たな指定は行われていません。しかし「秋草鶉図屏風」は今後、重要文化財として指定されることもあり得る優れた作品です。4位は石橋財団アーティゾン美術館（旧ブリジストン美術館）。重要文化財の尾形光琳筆「孔雀立葵図屏風」があります。

3位はMOA美術館。ここの尾形光琳筆「紅白梅図屏風」は天下の名宝で国宝に指定されています。2位は根津美術館。説明不要の有名作品「燕子花図屏風」があります。言うまでもなく尾形光琳筆の国宝です。

そして第1位は「静嘉堂@丸の内」。俵屋

宗達筆の「源氏物語 関屋霽標図屏風」は、源氏物語の十六帖と十四帖に題材をとったもの。物語の背景に大自然を配し源氏絵を新たな発想のもとに解き放った、近世絵画史上の革命的な作品とされる国宝です。

「静嘉堂@丸の内」開館記念展を開催中

「静嘉堂@丸の内」では静嘉堂創設 130 周年・新美術館開館記念展として「響きあう名宝 曜変・琳派のかがやき」を開催中です。静嘉堂所蔵の国宝 7 点をはじめ茶道具、琳派作品、中国書画や陶磁器、刀剣などの選りすぐりの名宝を展示しています。

国宝 7 点のうち「源氏物語 関屋霽標図屏風」と並ぶ 2 大注目作品のひとつが、南宋時代の茶碗「曜変天目」です。世界に 3 つしかない曜変天目はすべて日本にあり、あとの 2 つは京都・大徳寺龍光院と大阪・藤田美術館に収蔵されています。「静嘉堂@丸の内」の曜変天目は、徳川将軍家が所蔵していたものを三大将軍・家光の時代に乳母の春日局の実家である稲葉家に下賜されたことから「稲葉天目」と称されます。

このほか、岩崎彌之助・小彌太父子が日本美術・文化だけでなく、そのルーツでもある中国美術・文化に強い思い入れがあったことを示す中国絵画や漢籍が展示され、静嘉堂所蔵の日本刀 120 振りの中から、鎌倉時代の刀剣で国宝の「手搔包永」も展示されています。

「静嘉堂@丸の内」のオープン前日の特別内覧会で文化庁の都倉俊一長官は、これからの日本にとってインバウンド振興が重要であり、そのために文化財を活用し観光立国に貢献すると方針のを説明し「国際交流を活発化して日本文化の発信を進め

るだけでなく、経済効果を取り込み国を維持していく」のだと述べられました。

新型コロナウイルスの感染拡大もピークアウトし、いよいよ旅行が活発化すると期待していますが、そこに美術館を組み込んでいただきたい。「静嘉堂@丸の内」の周辺には出光美術館、ステーションギャラリー、三井記念美術館、宮内庁・三の丸尚蔵館といった魅力的な美術館があり、各美術館とコラボレーションの話し合いも進めており、ゆくゆくは丸の内を中心とした一つの美術館ゾーンを形作っていきたいとも考えています。

私は月刊の美術専門雑誌「國華」の編集委員も務めています。この雑誌は世界最古の美術雑誌で、先ごろ創刊 1500 号を発刊しました。美術以外のジャンル、たとえば歴史学や哲学、心理学、法学、経済学等々の最古の専門雑誌はすべて欧米のもの。しかし美術に関しては最古の専門雑誌が日本にあります。日本は美の国なのです。旅行業界の皆さんにも、日本の美術や美術館の魅力を中心に据えた旅行を推進してほしいと思います。

<Profile>

こうの・もとあき●1943 年東京生まれ。東京大学文学部美術史学科卒業、同大学院人文科学研究科修了。東京国立文化財研究所文部技官、名古屋大学助教授、東京大学教授などを経て 2006 年秋田県立近代美術館館長就任。2015 年より現職。秋田県立近代美術館名誉館長や東京大学名誉教授、美術雑誌「國華」編集委員も務める。近世美術の専門家で琳派研究の第一人者として著書多数。「饒舌館長ブログ」で美術情報を日々発信している。

